

ポストコロナ時代を見据えた「社会に開かれた」ロシア語教育課程の再構築

ICTを活用した日露交流をベースとしたロシア語学習

横井 幸子(大阪大学)

依田 幸子(札幌国際情報高校)

1. はじめに

2020年春コロナ禍に見舞われ、高校のロシア語教育も少なからず影響を受けた。2021年度は、2019年度まで対面を前提として構築してきたロシア語教育モデルをさらに発展させ、2020年度に手探り状態でとにかく実施したオンラインでの日露交流の経験を生かし、ポストコロナ時代を見据えて「社会に開かれた」ロシア語教育のあり方を、オンラインでの実施にも対応できるよう具体的なICTの使い方を検討しながら再考した。

2. 概要

2021年度は、北海道旭川南高校、札幌丘珠高校、札幌国際情報高校の3校を研究拠点校として、以下の通り具体的な目標を設定して活動した：

- 1) 高大で連携し、「主体的・対話的で深い学び」が生じるような日露オンライン交流プログラムの設計と実施、ICT活用の検討および教材の開発をする。
- 2) オンライン・対面での日露交流を軸とするロシア語学習のための教科書を完成させる。まず、オンラインでの交流や授業を行う際に生じる様々な問題を具体的に持ち寄り、整理した。中でも、Google翻訳やDeepLといった翻訳ツールをどのように活用したら学びにつながるかという問題が全関係者共通の問題であったため、「読む」「書く」活動に絞って、翻訳ツールを活用して複数言語間を行き来することがどのようにロシア語学習につながりうるのか、2ヶ月に1度集まり、実践の報告と議論を重ねた。本年度は、講師として加納なおみ氏(國學院大学)をお招きし、トランスランゲージングの概念を活用したロシア語の書く活動について、個別のコーチングという形で指導して頂いた。本報告では、札幌国際情報高校における取り組みの成果を報告する。

今年度は、2019年度から継続して取り組んできた教科書の開発を完遂したい。今後オンラインでの日露交流学習にも対応できるよう、作成中であった教科書の内容を再検討し、改訂を加える。

3. 今後の課題

これまで蓄積してきた実践的ノウハウは全て対面をベースにしており、テクノロジーの使い方さえ会得すればそれをそのままオンラインで生かせる訳ではないことが日々の授業の中で明らかになってきている。言語能力そのもののあり方が問われるような根本的な問題に直面しているが、それは日々の授業における個々の活動に直結している問題であり、その議論が今後益々必要になると思われる。

以上